



藤堂高虎公の足跡①
県指定史跡
津城跡（その1）
（丸之内）

電車…近鉄津新町駅から
徒歩15分

車…伊勢自動車道津 I C
から車で10分

慶長13（1608）年、藤堂高虎が伊勢・伊賀に入ってから、今年がちょうど400年目に当たる。そこで、今号から6回にわたり、激動の戦国時代を駆け抜け、江戸時代初期に津の町の基礎を築いた武将藤堂高虎の足跡をたどることにしよう。

高虎は、弘治2（1556）年に近江国犬上郡藤堂村（現在の滋賀県犬上郡甲良町）に生まれた。若いころより武勇に優れ、数々の主君に仕えて、豊臣秀吉・徳川家康という天下人の下で数々の功績を挙げる。関ヶ原の合戦では東軍に属し、その戦功により12万石を加増されて20万石の大名となり、伊予国今治（現在の愛媛県今治市）を本拠とした。しかし、今治の町の完成を前に大坂の豊臣方を抑える目的で、要衝の地である伊賀・伊勢に配された。外様大名ながら畿内近くに領地を与えられたことは、將軍家康の信望の厚さを物語っている。

その巧みな築城術から、高虎は天下普請（幕府の命令による城の修築）に当たることが多かったが、自らの居城である津城の修築は、慶長16（1611）年に着手した。

現在、本丸北側の高石垣や東側に拡張された石垣の継ぎ目に、高虎による修築のあとを見ることができる。入府前から残る天守はそのままだ、城全体の構造は、海の近くで堀に海水を引き入れて築城した今治城に良く似る。直前に築城したその設計プランを活用したとも考えられるゆえんである。（次回に続く）

（「広報津」平成20年5月1日号）



石垣に当時がしのばれる津城跡